

旧姫路藩大庄屋・三木家住宅



岩井忠彦

福崎来住以前の三木氏

辻川の三木家住宅は江戸時代に姫路藩の大庄屋をつとめた三木氏の居宅であり、またそのための役所でもあった。

住宅の主である三木氏は、孝霊帝の子孫とも、伊予国小市国造の乎致命の後裔ともいう。小市は伊予国（愛媛県）越智郡のことで、その地名から越智姓を名乗ったが、後に同国温泉郡河野郷を拠点としたので河野氏を姓とした。俗に河野水軍といわれる、海の有力者の一族である。系図の常としてこのあたりの真相は定かではないが、三木氏の祖が当時瀬戸内海の海上交易に関係していたことは事実だろうと思われる。

一四世紀、通堯が当主の時、讃岐国三木郡、現在の香川県木田郡三木町に移った。高松市の南東の農村地



英賀城本丸跡付近



英賀城の土塁
(英賀神社境内)

頃で、通近の嫡子の通武は赤松満祐の娘婿になり、英賀城（姫路市）を拠点として活動した。

当時は書写山南麓の坂本が円教寺の門前町として賑わい、商工業が発展して人口が集中していた。西坂本には赤松氏の守護館が置かれ、政治的にも経済的にも播磨国の中心地だった。英賀（英賀保）は夢前川を通じてその外港となり、海上交通の要衝として繁栄していた。東福寺首座だった季弘大叔の日記『蔗軒日録』の文明一七年（一四八五）三月二〇日の条には、朝英賀を出港、夜半に泉津（堺か）に着いたとある。これをみると、ほぼ定期船のような形で堺港（大阪府堺市）あたりと連絡があったらしい。河野水軍の流れをくむ三木氏には恰好の地だった。

一五世紀末、ここに浄土真宗（一向宗）の教線が延びてきた。明応八年（一四九九）頃には六つの坊と三つの道場が、永正二五年（一五二八）には英賀御堂が建設されて、播磨布教の拠点になった。

戦国時代末期、天下統一を目指す織田信長は一向一揆と各地で争い、最後に大坂（大阪）の石山本願寺との戦いに入った。英賀城も信長方の武将羽柴（豊臣）秀吉軍の攻撃を受け、天正八年（一五八〇）に陥落する。織田対毛利の最前線で、華々しい合戦があったとも伝えられる。しかし、網干の住民に縄や竹を持って合戦に参加するよう命じているところをみると、秀吉は正面から攻撃するのではなく、水に守られた城を逆に水攻めにする戦術だったらしい。『信長公記』のいうように、それほど激しい戦闘はなかったというのが真相のようである。

合戦が終わると、秀吉は英賀城の残党を厳しく追及せよと布告する一方で、英賀御堂を二分して船場と亀山（ともに姫路市）に移して再建させ、所領を与えている。このあたりが秀吉の戦略眼の凄さで、抵抗力を失った敵を討つために味方に無用の損害を出すことを嫌い、逃げ道を

与えて戦鬪を終結させたのである。

その結果、英賀城の有力者も多くは諸方へ散っていった。商業を通じて各地と交流があり、新しい知識や技術を蓄積していたからだろう、彼らはその後さまざまな方面で活躍している。三木安忠もその一人で、飾磨津(姫路)に移って酒造業などを営んだ。この頃になると、姫路城とその城下町が播磨の中心として繁栄を始めていた。飾磨津はその外港として急速に発展し、多くの人々が各地から集まっていた。

三木氏、福崎へ移る

飾磨津に移った安忠の子息の利通・通称甚左衛門が、当時の姫路藩主榊原(松平)氏の新田開発計画に応じて福崎町の辻川に居を移したのは、幕藩体制が安定に向かいつつあった明暦元年(一六五五)のことである。

福崎町の市川左岸地域は、中世にはほぼ田原庄に含まれていたが、市川の河岸段丘面に立地しているために灌漑の水は小さな谷川や溜池に頼らざるを得ず、未開発の部分が多かった。これは他の大きな河川流域にも見られる現象で、中世の土木工事の技術では、市川の水を灌漑に使うことは難しかったのだ。

辻川に移った利通も二代目の吉忠も、市川左岸の段丘面の開発に取り組んだ。その努力が短期間で実るはずはなく、以後代々、そのための努力を続けなければならなかった。例えば五代目当主の通庸は、寛政元年(一七八九)、藩の許可を得て市川の難所だった犬ヶ鼻(大鼻石)付近を開削している。井ノ口など九か村の住民はその功を讃えて、天保一四年(一八四三)に「新渠碑」を建てた。それは今も井ノ口の国道東側に残っている。また、六代目の通明は、幕末近くながらも開拓が進んでいなかった、西光寺野の開発を主導している。こうした努力の結果、この地域の耕地は確実に広がっていった。

通庸の前々代、三代目当主の善政が姫路藩から辻川組二一か村の大庄屋役を命じられたのは、元文二年(一七三七)のことである。大庄屋は概ね各村に置かれていた庄屋を、さらにいくつか束ねて統括する、姫路藩独特の役職である。法令の伝達や年貢等の割り付け、管内の村々の紛争の処理などにあたり、名字帯刀を許されるのが普通だった。単なる末端の行政官ではなく村落共同体の長という一面もあったから、住民の信望があることも必要だった。以後、

八代目の通済の時に明治を迎えるまで、三木氏は代々大庄屋役をつとめることになった。

三木家住宅にも危機はあった。義人滑原甚兵衛で有名な姫路全藩一揆が起こつたのは、五代目の有敬が大庄屋役を継いだ寛延元年(一七四八)のことである。正確な記録は残されていないが、『播姫太平記』は約六〇の庄屋や大庄屋宅が打ち壊されたといい、『播陽多我身飢』によれば打ち壊しを免れた大庄屋を九家とする。一揆の指導者たちは保管されている文書を審査し、打ち壊すかどうかを決めたともいう。三木家がそれを免れたのは、新田開発の実績などもあって住民の間に信望があったからだろう。

明治四年(一八七二)には、当時の姫路県・生野県で播但一揆が起こつた。役人が三木家に出張中だったこともあって大勢が押し寄せた。刀傷など多少の破損は被ったが、この時も建物が破壊されてしまうことは免れた。

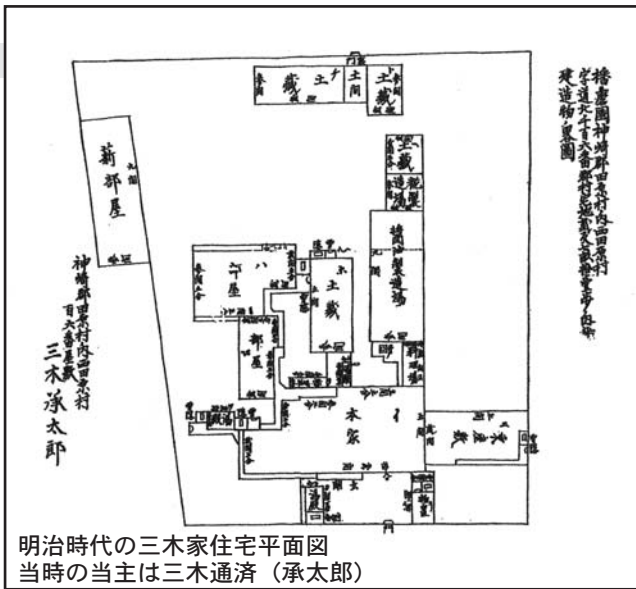
三木家の住宅群

辻川に移るとともに三木家の居宅も建てられ始めたはずだが、現存する建物のうち最も古いものは元禄一〇年(一六九七)の内蔵、次いで宝永

二年(一七〇五)の主屋、正徳三年(一七一三)の酒蔵で、これらは二代目の吉忠時代の建造である。続いて、三代目の善政の時の安永二年(一七七三)に副屋と離れが建てられた。さらに江戸時代の後期に角蔵と厩が、明治七年(一八七四)には表門が、そして明治時代前期に米蔵が完成した。これら現存する九棟のすべてが、昭和四七年(一九七二)に兵庫県的重要文化財に指定されている。これだけ多くの建物が残っている例はめずらしいし、戦後まで使用されていたので、生活の場としての雰囲気は今なお漂わせている。その意味でも貴重な文化財である。

主屋―播磨伝統の建築様式

住宅群は築地塀に囲まれた広い敷地に建てられている。表門から入るとすぐ、正面に建っているのが主屋である。表門は切妻造本瓦葺、二間一戸の棟門である。切妻造は、例えていえば書物を半開きにして伏せた形の屋根の形式をいう。表門や土塀と主屋との間隔が狭いように感じられるのは、南側の道路が拡幅された際に用地として提供したからである。この表門はその時に改築された。主屋を見よう。播磨の民家の伝統



明治時代の三木家住宅平面図
当時の当主は三木通済（承太郎）

である外見上の特徴は、入母屋造平入口だった。入母屋造は切妻屋根の下方に庇をめぐらした屋根の形で、平入あるいは平入口は主屋根の面が見える側から棟（桁）に向かって直角に入る形式である。土の通路が入口から裏口まで続き、右側に既と土間、左側に田の字形に四つの部屋があるのが、播磨の民家の基本的な形だった。これも県の重要文化財である柳田国男の生家もそうだが、三木

家の主屋もこれをベースにした建て方になっている。現在は東西に広いが、西側の表二部屋は元文二年（一七三七）に増築されたもので、当初は二部屋だった。行政機関としての役割があるので、これでは手狭すぎたのだろう。主屋は桁行が十一間で梁間が四間という大きな建物で、本瓦葺の屋根は広く重厚である。鬼板（鬼瓦）には三木家の家紋を刻み、東側頂部には

越屋根と呼ばれる小さな屋根がある。越屋根は吹き抜けになっていて、炊事その他で使われる多量の薪炭の煙の排出や、採光、通風などの機能を持つ。それだけではなく、広い屋根に変化を与えることで、結果的にその単調さを和らげる効果を生んでいる。また、入口の上方、大屋根と庇の間の虫籠窓や入口西側の格子が、近世民家の伝統的な美しさを今に伝えている。入口から大黒柱の右（東）側を通って裏口まで、これも播磨の民家の伝統を受けた通り抜けの土間になっているが、中ほどの大黒柱筋に格子戸を設けて南北に区切っている。大黒柱は棟まで届く長大なものである。既が

繪畫園神楽町由良町内田町
元文二年六月廿八日新築
建造物の遺蹟



三木家住宅リーフレット掲載の建物配置図を一部改変
図面製作：尾瀬耕司（神戸建築文化財研究所）



三木家主屋と表門

主屋の東南隅に別棟に建てられているので、通路東の表側は唐臼の置き場になっている。その上方は中二階の下男部屋で、壁梯子によって出入りする。

格子戸の北側には、天井が吹き抜けになった三畳間の「ひろしき」がある。その奥、通路西側の台所に面するあたりには竈などが置かれている。

通路左側の居室部分に移ろう。表(南)側は、東側から順に「みせのま(役所の間)」、「げんかん」、「中のま」、「かみのま」になっている。「みせのま」は六畳で、主として大庄屋役の日常業務に使われた。ここ天井裏は「つし二階」になっているので、そこへ上がるための階段が通路側に設けられて



主屋入口 虫籠窓と格子

「げんかん」は十畳で、これも多くは行政的な業務に使用された。部屋の庭に面した南側は玄関式台になっている。藩の役人などはこちらから家に入った。それで、入口すぐ左側の部屋を「みせのま」といい、この部屋を「げんかん」と呼ぶ。

「げんかん」前の庭は一種の広場で、その奥の植え込みのある庭とは「げんかん」と「中のま」の境界線を南に延長した部分に設けられた別棟の、藩の重役などの来訪時に使われたという湯殿・便所と板戸とで切り離されている。ここは、所轄する村々の争論などの評決が行われる時に、いわゆる白洲として使われた。



「かみのま」の書院、床の間など

「中のま」と「かみのま」は併せて表座敷と呼ばれる。ここは重要な来客の接待などに使われる部屋である。「中のま」は八畳で、北側の東半分は仏壇、西半分に天袋と違い棚を付ける。普段は閉じられて見えないようにされているが、その下に格子窓があつて北側の「おく」とつながっている。表座敷で異変があつた時のための通路であり、一種の武者隠しである。「おく」の外には、危急を知らせるための半鐘が吊り下げられている。いずれも普通の民家にはみられない仕掛けである。

「かみのま」は八畳で、部屋の北側に床の間をつくり、西側には付書院が設けられている。「中の



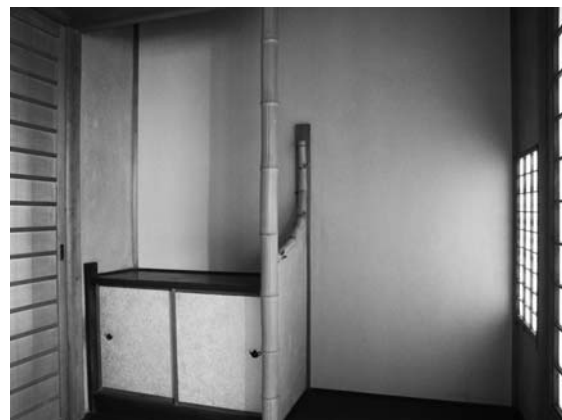
庭と「げんかん」の玄関式台

「かみのま」の西には別棟の二畳の部屋・湯殿・便所があり、縁側でつながっている。小さな部屋だが、床柱に竹を使うなど数寄屋造風の、一種の遊び心が感じられる。

主屋一階の北側は、土間側から順に「よじょうはん」、「かみさんのした」、「おくのくち」、「おく」の四部屋になっている。

「よじょうはん」の北側は台所に改造されているが、もとはこれを含めた六畳の部屋だったらしい。

「かみさんのした」は四畳で、「よじょうはん」との間は三枚の板戸で



西別棟二畳間の床

「ま」との間には透かし彫りの欄間が美しい。表座敷二部屋の南側は縁側で、その外は前栽になっている。

仕切られている。中央の戸の上部の目の高さのあたりに「よじようはん」側を見ることが出来る円い覗き穴があり、鴨居の内側には槍掛けもある。防犯や変事の際に備えたもので、これも普通の民家には見られない細工である。

「おくのくち」は四畳半で、「かみさんのした」との間は引き違い戸で区切られている。容易に開けられないように、この板戸などにもさまざま工夫が施されている。

「おく」は六畳で、北側に床の間と押入れがある。南側にも押入れがあるが奥行きは浅く、引き戸と格子がある。ここが「中のま」との通路の「おく」側の出口である。また「お



「中のま」から「おく」への通路

くのくち」との境の鴨居には、「かみさんのした」と同様に槍掛けも設けられている。

副屋と離れ、土蔵など

表門と主屋以外の建物に移ろう。

副屋は二階建本瓦葺の建物で、主屋の西北隅の「おく」から北へ三畳の板の間まで延びる、廊下の西側にある。南から「おろくじよう」・「かみのま」・

「こま」の三室と三畳の板の間になっていて、主屋と離れをこの廊下で結んでいる。「おろくじよう」と「かみのま」は六畳で、「おろくじよう」の

西側は二間の押入れになっている。「こま」は四畳半で、東側の一畳半分が板張りになり、廊下の部分と合わせて三畳の板の間を構成している。副屋の北にあるのが入母屋造本瓦葺の「離れ」で、副屋の廊下によって主屋と結ばれている。この建物の中心になるのが田の字型に配置された四部屋である。

南側の二室はともに八畳で「おへや」、北側の各六畳の二室は「新座敷」と呼ばれている。南北とも、西側の部屋には床の間を設ける。「おへや」両部屋の南側と「新座敷」両部屋の北側とは濡れ縁になっている。平書院や付書院などを設け、面皮柱を

用い、長押を使って天井がやや低いなどの特徴がある。数寄屋造を加味した建築で、主屋とは趣が違う建て方になっている。これらの部屋の北東には物入れや布団部屋、便所などがあり、これを加えると「離れ」は六部屋になる。

北から見た三木家全景



北から見た三木家全景



内蔵（左）と酒蔵（右手前）・角蔵（右奥）
主屋裏口から

裏口を北に出たところの中央にあるのが、現存する建物の中では最も早く建てられた内蔵である。その東側に飾磨津時代を思わせる酒蔵、酒蔵の北に角蔵、そこからやや離れて敷地の北端の中央東寄りに米蔵がある。建てられた時期はそれぞれ違いますが、いずれも一重二階建の切妻造本瓦葺の建物である。なお、酒蔵は北側の二間半が味噌部屋、角蔵は北側一間半が蔵で残りは引割部屋になっている。いずれも火災に備えて分厚い土壁で塗りこめられている。

敷地の東南隅には厩があるが、久しく使われていないため荒廃し、解体修復中である。そのほかに隠居所もあったが、道路の拡幅時に取り除いたという。大工仕事などのための作業場なども撤去されている。その他は現在見られる通りである。

地方文化の中核として

明治初期に作られた三木家の蔵書目録には、為政者必読とされた『資治通鑑』や『六論衍義大意』などの

漢籍、『万葉集』や『太平記』などの日本の古典、『農家益』『農業善処』などの農業書、『天文図解』『馬医書』などの実学書、『切支丹由来』や『異船事実記聞』などの時事関係の書物等々がみえ、多量かつ広範囲に及ぶ書物が所蔵されていたことが知られる。柳田國男が「みせのま」の上の二階で三木家所蔵の書物を読み、それが柳田民俗学の原点の一つとなったというのは、広く知られた逸話である。北条（加西市）へ移った家族と別れて一年余りの間三木家に預けられていたのは、明治一八年（一八八五）、十二歳の頃のことだった。

三木家代々の当主は学問や芸術を好んだ。五代目の通庸は明和九年（二七七二）、一八歳の時に京都に出て皆川淇園に師事しているし、六代の通明は庶民の大学といわれた大坂（大阪）の懐徳堂の堂主だった中井竹山や、龍野（たつの市）の藩儒、股野玉川の家塾の幽蘭堂に学んだ。三木家と懐徳堂の結びつきは長く、蔵書目録も懐徳堂の罫紙に書かれている。七代目の通深は父の通明とともに姫路の島琴陵に絵画を学び、大坂に出て並河寒泉に、江戸で当時の大学頭林檉宇に学んだ。三四歳という短命だったが天才肌の文化人で、

学者や文人墨客が各地から集まって逗留して自由に創作活動を行い、三木家は一種のサロンのような状況になったらしい。そのために家産を相当に消耗したというが、彼らの作品なども三木家には多く残されている。

自分が得た学問や文化を周囲に紹介し広めていったのも、三木家の功績の一つである。松岡家との代々の交友はよく知られていて、例えば通庸と柳田國男の曾祖父で医師だった義輔とは詩友であり、祖母で儒学や文学に秀でた小鶴は通深との交流でも知られる。このような活動を通じて、学問や芸術を尊ぶ気風が地域に浸透した。明治時代に多くの文人学者を輩出した背景には、その蓄積があったからに違いない。それは現在にも受け継がれ、社会の深層に生き続けているように思われる。

三木家住宅、その後

しかし、これほど多くの建物を管理し維持し続けることは難しい。かつては、たとえば大工さんや左官さんと年に各六〇人役の契約をしていたという。日時を限らず年に六〇日三木家に来て、気付いた所を補修・修築してもらったのである。それほ

どの手入れが必要なのだが、これには大きな財力を要する。広大な農地を所有していた時代にはできて、特に戦後になるとそれは不可能になった。また、人の出入りがなくなると建物は傷む。これだけ数多く広い建物を維持するためには、多くの人がここで生活する必要があるが、それも無理な時代になった。

蔵書や文書などが流出し、何度か盗難にも遭った。昭和五〇年代に入る頃には西別棟などで虫害が発生し、屋根も波を打つ状態になって、瓦の落下が心配されるようになった。重い土を大量に載せた屋根の重みなどによって太い柱や鴨居さえ歪み、補強しても動かない建具が増えた。十代目の当主だった庸一氏の夫人美子氏が、建物の換気を兼ねて春・秋の休日に見学者に住宅を開放され始めたのは、昭和五十年代半ばのことである。

その努力があっても、これだけの規模の住宅群を個人で管理し、維持することは事実上不可能だ。幸い当主の三木雅雄氏や福崎町当局の決断により、平成一六年（二〇〇四）に三木家の建物群が町に寄附された。現在では、修復を終えた主屋が一般に公開されている。

文化財は一度失われると元に戻ら

ない。さまざまな意味で貴重な文化財である三木家住宅群を、後世に永く伝えたいと思う。



傷みの激しい主屋昭和 55 年

